

作	を	祈	願	す	る	お	ま	ー	リ	た	。	独	自	の	田	楽	と	も
お	田	植	え	祭	リ	ー	と	い	う	行	事	に	参	加	し	た	。	
今	年	の	六	月		私	は		父	の	仕	事	の	手	伝	い	て	
か	。																	
か	完	全	に	忘	れ	去	ら	れ	て	い	る	の	で	は	な	い	た	
た	も	の	は	か	り	て		命	を	頂	い	て	い	る	と	い	う	
達	が	日	々	日	に	す	る	食	べ	物	と	い	う	と		加	工	
い	た	た	く	行	為	た	と	教	わ	。	て	き	た	。	し	か	し	
食	品	を	目	に	す	る	。	普	段	か	ら	私	は		食	事	は	
る	。	切	り	身	に	な	。	た	肉	や	魚	だ	。	日	常	的	に	
達	は		加	工	さ	れ		手	に	取	り	や	す	い	形	に	な	
シ	ー	ル	が	貼	ら	れ	た	食	材	が	す	り	ソ	と	な	ら	ん	
そ	う	さ	ま	ー	を		何	度	も		。	私	が	分	か			
は	。	飲	を	食	。	る		。	い	た	た	ま	す	。	と			
明	日	も	。	飲	を	た	べ		お	腹	を	満	た	す		毎	日	
今日		私	は	。	飲	を	食	へ	た		。	そ	し	て		き	。	
は	。	飲	を	食	。	る		。	い	た	た	ま	す	。	と			
そ	う	さ	ま	ー	を		何	度	も		。	私	が	分	か			
ー	パ	ー	に	言	く	と		。	半	額	ー	や		。	三	割	引	
る	。	切	り	身	に	な	。	た	肉	や	魚	だ	。	日	常	的	に	
達	は		加	工	さ	れ		手	に	取	り	や	す	い	形	に	な	
食	品	を	目	に	す	る	。	普	段	か	ら	私	は		食	事	は	
いた	た	く	行	為	た	と	教	わ	。	て	き	た	。	し	か	し		
達	が	日	々	日	に	す	る	食	べ	物	と	い	う	と		加	工	
た	も	の	は	か	り	て		命	を	頂	い	て	い	る	と	い	う	
か	完	全	に	忘	れ	去	ら	れ	て	い	る	の	で	は	な	い	た	
か	。																	
今	年	の	六	月		私	は		父	の	仕	事	の	手	伝	い	て	
お	田	植	え	祭	リ	ー	と	い	う	行	事	に	参	加	し	た	。	
お	田	植	え	祭	リ	ー	は	お	米	の	神	様	へ	感	謝	し		
作	を	祈	願	す	る	お	ま	ー	リ	た	。	独	自	の	田	楽	と	

に早乙女たちが稲を植える。この祭りを企画
 した米農家の一ノ瀬さんは、映画「七人の侍」
 の百姓が田植えをしている場面をモチーフに
 したそうた。また、一ノ瀬さんはこう言っ
 いた。
 「このまつりは、我々百姓が、農機具を使い
 淡々と農作業を行い、過ぎゆく一年の中
 で忘れていたお米という命への感謝と、命
 を育む大自然への感謝の念を取り戻したい。
 」と言っていた。この信念のもと何十々もの人
 々が集まり、開催された。私はこの祭りを通
 して、改めて私達が日頃から、食事を囲み
 食事を楽しむことができてきたこと、ありがたさ
 に気づいた。また普段の生活で感じることの
 ない、命の美しさ、命あることの喜びを感じ
 ることができた。
 日本には、古来から、自然崇拜的な考えが
 がある。これは日本独特の気候や、地震、火
 山、大国としての日本独特の風土が生んだもの
 だろう。自然は、私達に恵みを与え、時に牙

を剥く。特に今年はそれをよく実感した。ト
カウ列島での地震の連続。カバチナツカでの
巨大地震、豪雨災害だ。私達はこの大自然の
下に生きています。私達が生きるために失われ
た命、この大自然を無視して、傲慢な態度を
取ってはいけない。文明の進化とともに失わ
れてきた、この自然への感謝、命への感謝
の念を、今こそ取りもどさばいいのではない
だろうか。